

延岡市所在

かみみわこぎりばた

上三輪小切畑第1遺跡

県道北方土々呂線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

宮崎県埋蔵文化財センター

延岡市所在

かみ み わ こ ぎり ば た

上三輪小切畑第1遺跡

県道北方土々呂線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区の立地と環境(南から延岡市を望む)



調査区全景(直上から)



基本層序(調査区北側法面 西から)



竪穴建物跡(SA 1)貼床面検出状況(直上から)



7号土坑(SC 7)出土遺物(玉類)



7号土坑(SC 7)完掘状況(南から)

序

宮崎県教育委員会では、県道北方土々呂線道路改良工事に伴う発掘調査を行いました。本書はその報告書であります。

調査の結果、旧石器時代の遺物、縄文時代の集石遺構や遺物、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての遺構や遺物が出土しました。特に弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と考えられる竪穴建物跡や土坑からは、小形甕や小形壺、磨製石斧、勾玉、小玉などが出土しており、関連する住居と墓であると考えられます。

今回の調査で得られた成果は、当時の本遺跡周辺の歴史を解明する上で貴重な資料となるものと考えられます。

本書が学術資料のみならず、学校教育や生涯教育の場などでも活用され、埋蔵文化財保護に対する一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた地域の方々、関係諸機関、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 向井大蔵

例 言

- 1 本書は平成24年度県道北方土々呂線道路改良工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県延岡市上三輪町字小切畑に所在する上三輪小切畑第1遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、県土整備部延岡土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が調査主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが、平成24年12月4日から平成25年3月7日まで実施した。
- 3 発掘調査は、木場正浩、沖野誠が行った。また、現地調査における図面作成及び写真撮影については、上記以外に当センターの吉本正典、山田洋一郎、泊俊一郎、二宮満夫、谷口めぐみが行った。
- 4 空中写真撮影は南ふじに委託した。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる図面作成・実測・トレース・写真撮影は木場が整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の石材同定については当センターの松本茂、松田清孝の協力を得た。
- 6 本書の執筆及び編集は木場が行った。
- 7 グリッド杭については、延岡土木事務所から提供された4級基準点のデータをもとに、沖野が発掘作業員の協力を得て設置した。調査区の排土移動は株式会社カネトミに委託した。
- 8 自然科学分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 9 本書で使用した第1図「上三輪小切畑第1遺跡の位置と主な遺跡の分布図」は国土地理院発行の5万分の1地形図を、また第2図「上三輪小切畑第1遺跡周辺地形図」は延岡土木事務所が作成した500分の1現況平面図をもとに木場が作成した。
- 10 本書で使用した標高は海拔絶対高であり、方位は座標北(G.N.)を基本として、一部の平面図・遺構実測図には磁北(M.N.)を用いた。
- 11 検出遺構については下記の略号を用いる。
SA=堅穴建物跡 SC=土坑 SI=集石遺構
- 12 H1の他、本文中においては下記の略号を用いる。
K-Ah=鬼界アコホヤ火山灰 AT=始良Tn火山灰 Tr=トレンチ P=ピット
- 13 本書で使用する土層及び土器の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)による。
- 14 遺構・遺物写真など図版の縮尺は任意であり、統一していない。
- 15 調査で出土した遺物や記録等は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 I 章 調査の経緯	
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の組織	1
第 3 節 調査の経緯	2
第 II 章 遺跡の地理的、歴史的環境	
第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3
第 III 章 調査の方法と成果	
第 1 節 調査の概要	8
第 2 節 基本層序	8
第 3 節 遺構と遺物	10
1 旧石器時代の遺物	10
2 縄文時代の遺構	11
3 縄文時代の遺物	14
4 弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の遺構	19
5 弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の遺物	23
第 4 節 自然科学分析の結果	29
第 IV 章 総括	36

挿図目次

第 II 章 遺跡の地理的、歴史的環境	
第 1 図 上三輪小切畑第 1 遺跡と主要遺跡分布図	4
第 2 図 上三輪小切畑第 1 遺跡周辺地形図	6
第 III 章 調査の方法と成果	
第 3 図 Tr 配置図及び土層断面図	9
第 4 図 石器実測図(旧石器時代)	10
第 5 図 集石遺構実測図 1	12
第 6 図 集石遺構実測図 2	13
第 7 図 土器実測図(縄文時代) 1	15
第 8 図 土器実測図(縄文時代) 2	16
第 9 図 石器実測図(縄文時代)	17
第 10 図 K-Ah 層残存範囲と遺構分布図	20
第 11 図 竪穴建物跡及び P 1・P 2 実測図	21
第 12 図 SC 7 実測図	22
第 13 図 土器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭) 1	24
第 14 図 土器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭) 2	25
第 15 図 土器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭) 3	26
第 16 図 土器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭) 4	27
第 17 図 石器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭)	27
第 18 図 暦年較正曲線図	31
第 19 図 種実遺体	35

図 版 目 次

巻頭図版 1

- 上 調査区の立地と環境(南から延岡市街を望む)
- 下 調査区全景(直上から)

巻頭図版 2

- 上 基本層序(調査区北側法面 西から)
- 中 竪穴建物跡(SA1)貼床面検出状況(直上から)
- 下右 7号土坑(SC7)完掘状況(南から)
- 下左 7号土坑(SC7)出土遺物(玉類)

図版 1	遺構(1).....	37
図版 2	遺構(2).....	38
図版 3	遺物(1).....	39
図版 4	遺物(2).....	40

表 目 次

第1表	石器観察表(旧石器時代).....	10
第2表	土器観察表(縄文時代).....	18
第3表	石器観察表(縄文時代).....	18
第4表	土器観察表(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭).....	28
第5表	石器観察表(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭).....	28
第6表	放射性炭素年代測定結果.....	30
第7表	種実同定結果.....	33

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯

県道北方土々呂線は、延岡市北方町川水流から延岡市土々呂町に至る県道であり、延岡土木事務所によって、県北地域の交通網整備の一貫として道路改良工事が実施された。それに伴い、遺物包蔵地として認識されていた小切畑工区において、平成24年8月30日～31日にかけて、県文化財課による確認調査が行われた。

この確認調査の結果、同工事により掘削を受ける範囲に主に縄文時代から弥生時代にかけての遺構や遺物が存在することが判明した。そこで、県文化財課と延岡土木事務所による協議が実施され、施工上現状保存が困難な部分について記録保存のための発掘調査を行うことになった。

現地調査は、延岡土木事務所への依頼により平成24年12月4日から平成25年3月7日までの間に実施した。

第 2 節 調査の組織

上三輪小切畑第 1 遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は下記の組織で実施した。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

【調査機関】 宮崎県埋蔵文化財センター

平成24年度 発掘調査

所 長 北郷 泰道

副所長 佐々木 真司

総務課長 坂上 恒俊

総務課総務担当リーダー 副主幹 高園 寿恵

調査第二課長 永友 良典

調査第二課調査第三担当リーダー 副主幹 吉本 正典

調査第二課調査第四担当 主査 木場 正浩(調査担当)

調査第一課調査第二担当 主事 沖野 誠(調査担当)

事業調整 文化財課 主査 今塩屋 毅行

平成25年度 整理作業

所 長 向井 大蔵

副所長 長津 宗重

総務課長 坂上 恒俊

総務課総務担当リーダー 副主幹 高園 寿恵

調査第二課長 菅付 和樹

調査第二課調査第三担当リーダー 副主幹 吉本 正典

調査第二課調査第四担当 主査 木場 正浩(整理担当)

第3節 調査の経緯

発掘調査の経過は以下のとおりである。

平成24年	8月30～31日	確認調査実施。
	9月19日	現地協議(延岡土木事務所・文化財課・当センター)。
	11月7日	現地打ち合わせ(延岡土木事務所・当センター)。
	11月21・26日	発掘作業員募集に伴う雇用説明会。
	12月4～7日	調査着手、現場事務所及び作業員駐車場の設置、重機による表土除去。
	12月10日	発掘作業員9名の雇用開始。
	12月11～13日	調査区内の安全対策、表土(I層)掘削、基準点の設置。
	12月17日	竪穴建物跡(SA1)及び集石遺構(SI1～4)4基検出。 調査区概略図及びK-Ah層上面でのコンタライン作製。
	12月20日	竪穴建物跡(SA1)周辺部の攪乱土坑除去。
	12月26日	集石遺構(SI5・6)2基検出。
平成25年	1月7～11日	竪穴建物跡(SA1)の精査及び貼床の掘削。
	1月15日	竪穴建物跡(SA1)の遺物検出状況の図面作成及び写真撮影。
	1月24日	竪穴建物跡(SA1)完掘。
	1月29日	空中写真撮影実施。
	1月30日	残存K-Ah層(III層)の掘削開始。
	1月31日	3Tr周辺でスクレイパー検出。
	2月6日	IV・V層掘削開始。
	2月7日	土坑(SC6・8・9)3基及び集石遺構(SI7)検出。
	2月14日	土坑(SC7)の検出。
	2月21日	土坑(SC7)から勾玉を検出。
	2月26日	各Trの図面作成及び写真撮影。
	2月27日	Tr拡張による図面の修正。
	3月4～6日	図面修正・確認及び写真撮影。発掘作業員雇用終了。
	3月7日	調査終了。

上記の期間中は作業員諸氏の協力はもとより、延岡市の埋蔵文化財担当職員に貴重な助言や協力を頂いた。

第Ⅱ章 遺跡の地理的、歴史的環境

第1節 地理的環境

延岡市は、宮崎県の北部太平洋岸に位置し、東は日向灘に面し、北は佐伯市(大分県)、西は日之影町、南は門川町、美郷町にそれぞれ隣接している。市内を貫流する主な河川は、五ヶ瀬川、北川、祝子川がある。五ヶ瀬川はその源を熊本県との県境に位置する向坂山から発し、阿蘇外輪山、高千穂町、日之影町を経て、市内で五ヶ瀬川と大瀬川に分流している。河口近くにおいて、五葉岳から発している祝子川と傾山から発している北川と合流し日向灘へと至る。これらの河川は古くから交通の手段や漁業を営む場として位置づけられてきた。

市内の中心部にある平野は、上記の河川によって堆積した扇状地性三角州である。規模は小さく丘陵や河川に分断されている。この平野では縄文海進時には五ヶ瀬川分岐点近くの天下町付近まで海進したと思われる。その後、各河川の侵食運搬作用により流下した堆積物が、日向灘の沿岸流による海岸砂州と定められ沖積平野を形成した。沖積平野には、市街地や住宅地、工業地域が集まり県北部の中心都市となっている。

平野部の北方には行藤山(829.9m)、可愛岳(727.7m)といった火成岩からなる急峻な山体があり、それらの山体は、高平山(406.6m)や岡富山(198.0m)などの堆積岩からなる低山を貫いて分布している。南方には愛宕山(251.2m)から南西方向に連続する堆積岩からなる山地が分布している。

上三輪小切畑第1遺跡は、延岡市南部の烏帽子岳から北側の小切畑集落に向けてのびる緩やかな丘陵尾根の先端付近に位置する。北方には五ヶ瀬川が東西に流れ、標高は約90mであり、山地から平野へと移り変わる地形である。本遺跡北方の川水流付近では、傾斜が緩やかになり、それに伴って河川の運搬力も弱まるため、五ヶ瀬川が大きく北に湾曲し、大量の小石が堆積した河川敷を形成している。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

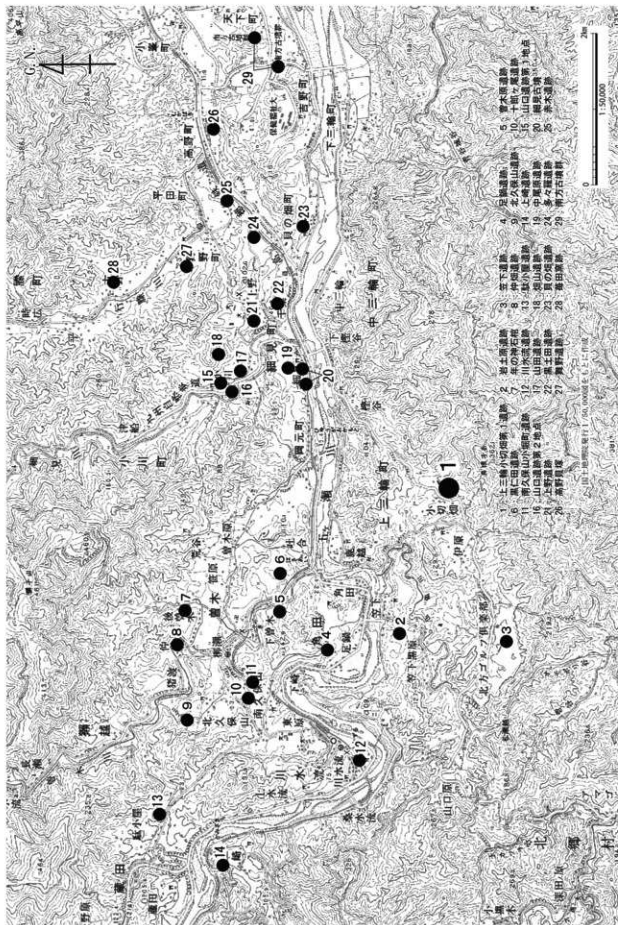
矢野原遺跡、岩土原遺跡、蔵田遺跡、笠下遺跡、赤木遺跡、吉野遺跡等において、始良Tn火山灰層(以下AT層と省略)下位で石器群の確認例がある。

本遺跡周辺では、赤木遺跡からAT上位の石器群として、切出形ナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群と細石器を中心とする一群の2つの文化層が確認されている。笠下遺跡では、ナイフ形石器や剥片尖頭器、細石器が出土し、岩土原遺跡では、半船底型細石器と隆帯上に爪形文を施した土器が共存して出土している。黒仁田遺跡では、AT上位から狸谷型のナイフ形石器や剥片尖頭器を含む70数点からなる石器群、更にその上層から細石刃石器群が確認されている。特に細石刃石器文化層では、複数の石器ブロックが確認されており石器製作作業場としての可能性が報告されている。山田遺跡からは、礫器や局部磨製石斧などの重量石器が集中して出土しており、全国的にも数少ない事例となっている。

縄文時代

市内では、最古の貝塚と考えられる大瀬川流域の大貫遺跡や沖田川流域の沖田貝塚などがあり、地藏ヶ森遺跡からは押型文土器と塞ノ神式土器の時期の集石遺構が確認されている。

本遺跡の周辺では、山田遺跡で、集石遺構や炉穴群、陥し穴状遺構、円形配石遺構などが確認され、集落構成を示す事例の一つと考えられる。また、南久保山小堀町遺跡から押型文土器、貝殻条痕土器、黒色磨研土器が出土している。



第1図 上三輪小切畑第1遺跡と主要遺跡分布図

弥生時代～古墳時代

弥生時代後期から古墳時代後期にかけて、中尾原遺跡をはじめ、蔵田遺跡、畑山遺跡、地藏ヶ森遺跡、林遺跡などで集落の確認例がある。

本遺跡の周辺では、山口遺跡第2地点で、弥生時代後期から古墳時代中後期の竪穴建物跡が約30軒確認されており、大規模な集落である中尾原遺跡や小鍛冶跡が確認されている畑山遺跡との関連性が注目される。また山口遺跡第2地点からは異形土器も出土している。熊本県城南町歴史民俗資料館にある舟形土器(弥生後期後葉：2世紀後半)に類似しており、祭祀に使われた土器とも考えられる。

墳墓では、多々羅遺跡で箱式石棺墓が確認されており、当遺跡の北東約6kmの丘陵地では、前方後円墳6基を含む国指定の南方古墳群が点在している。(なお第1図29では、南方古墳群の西端の2か所を示している。)

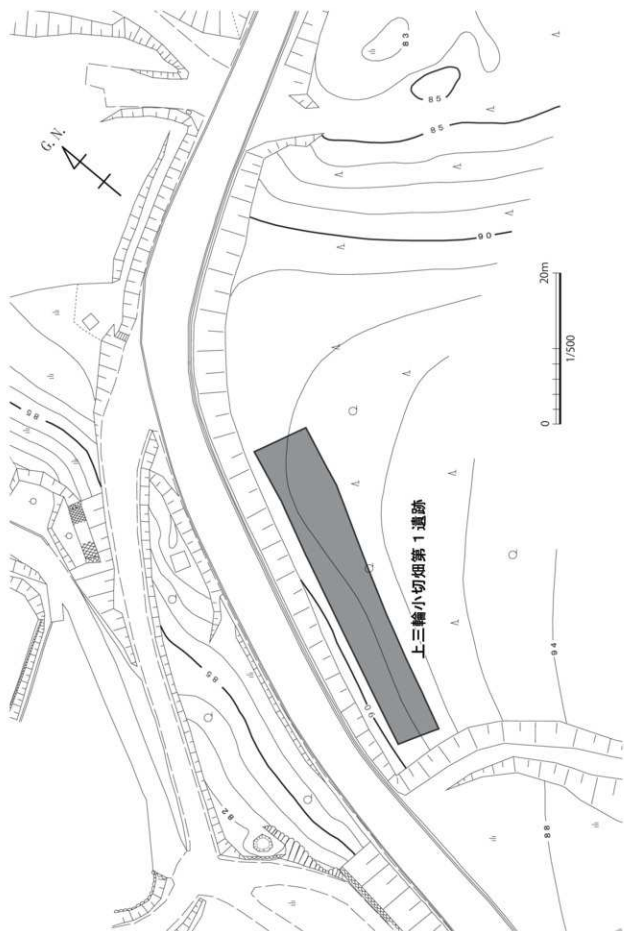
古代～中世

9世紀から10世紀にかけて須恵器が生産された菑田窯跡が知られている。また十数軒の掘立柱建物跡や土坑が確認されている畑山遺跡や大型掘立柱建物跡群や土坑墓、五輪塔等の確認された林遺跡等がある。「今山八幡宮旧記」において、天永元年(1110年)に「三和」(現上三輪町)が10月放生会の神馬東舞二人を負担していることが記されている。本遺跡周辺において集落が存在したことを確認できる文献資料である。

近世以降

延岡城(延岡城内遺跡)や城下町(延岡城下町遺跡)、窯跡(小峰窯跡)等で調査が実施されている。延岡城は、初代藩主高橋元種が松尾城(延岡市松山町)から中洲内の丘陵地に築城したものである。この時に城下町づくりに着手しており、現代にいたる延岡の町の原型となっている。

高橋氏は慶長18年(1613年)に改易され、有馬氏、三浦氏、牧野氏を経て、内藤氏の藩政に至り幕末期を迎えることになる。第4代藩主の内藤政韶(1776年～1802年)は、居宅である西の丸(現内藤記念館)から採集した土器をきっかけに、大貫町浄土山の古墳(国指定史跡南方古墳群第24号墳)などの調査を行い、「集古標目」「集古探覧」として記録している(戦争により焼失)。明治維新前後に活躍した延岡藩家老原時行は、延岡周辺の考古資料を収集し、その中には吉野町出土とされる石剣がある。その後、彼の影響を受けた有馬七藏は、小学校の代用教員時代に天下町字今井野(延岡植物園周辺)で縄文から古墳時代にかけての遺物を多数収集し、有馬コレクションとして学界に広く知られるようになったが、戦災により全て焼失している。大正から昭和初期にかけては、東京大学講師島居龍蔵による南方古墳群、延岡古墳群の発掘調査が実施されている。調査は大正14年10月から昭和4年7月にかけて、のべ3回にわたり浄土寺山古墳をはじめとする市内で主要な古墳において実施され、その成果は「上代の日向延岡」として出版され、現在でも重要な文献となっている。戦後の宮崎県における考古学研究は、石川恒太郎の功績によるものが大きく、市内でも菑田窯跡、貝の畑遺跡などを数多く調査し、「宮崎県の考古学」「延岡市史」などに紹介されている。



第2図 上三輪小切畑第1遺跡周辺地形図 (S=1/500)

【参考文献】

- 延岡市史編さん室 2013 『延岡市史 市制八十周年記念十年史』 延岡市
- 宮崎県 1989 『宮崎県史 資料編 考古1』 宮崎県
- 北方町史編纂委員会 1972 『北方町史』 北方町
- 下中弘 1997 『日本歴史地名大系46 宮崎県の地名』 平凡社
- 宮崎県教育委員会 1995 「打扇遺跡 早日渡遺跡 矢野原遺跡 蔵田遺跡」『一般国道218号椎畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 宮崎県教育委員会 1972 「友内山式箱式石棺」「大貫遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第16集
- 宮崎県教育委員会 1988 「地蔵ヶ森遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第31集
- 宮崎県教育委員会 1990 「林遺跡」『一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書』
- 宮崎県教育委員会 1983 「延岡市苅田跡跡」『宮崎県文化財調査報告書』第26集
- 延岡市教育委員会 1992 「上南方地区遺跡—県営圃場整備事業上南方地区に伴う埋蔵文化財調査概要報告書—中尾原遺跡 畑山遺跡」『延岡市文化財報告書』第8集
- 延岡市教育委員会 2001 「平成12年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘報告書 吉野遺跡(第4次) 吉野遺跡(第6次) 延岡古墳群第16号墳 多々羅第1遺跡 新宮遺跡 吉野遺跡(第7次)」『延岡市文化財調査報告書』第24集
- 延岡市教育委員会 2012 「岩土北原遺跡2次・4次、岩土原遺跡2次・3次 市道岩土原整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」『延岡市文化財調査報告書』第48集
- 延岡市教育委員会 2010 「市内遺跡 平成21年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」『延岡市文化財調査報告書』第42集
- 北方町教育委員会 1990 「笠下遺跡」『北方町文化財報告書』第1集
- 北方町教育委員会 2004 「南久保山小堀町遺跡」『北方町文化財報告書』第5集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 「山口第2地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第99集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第146集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「吉野第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第155集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「赤木遺跡第8地点(第三次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第165集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「林遺跡II」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第174集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009 「黒仁田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第181集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009 「赤木遺跡第8地点(第一次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第182集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 「南久保山小堀町遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第206集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012 「十郎ヶ尾遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第218集

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の概要

重機によって表土を除去した後、木根を取り除きながら、二次堆積K-Ah層(Ⅱ層)及びPK-Ah層(Ⅲ層)上面で精査し、攪乱土坑5基、集石遺構6基(SI 1～6)と堅穴建物跡1軒(SA 1)を検出した。調査区に関する地元の方への聞き取り調査から、調査区は、戦時中に芋畑として使用しており、芋の貯蔵穴を掘っていたことや戦後に檜を植林したことが判明した。攪乱土坑は、芋の貯蔵穴として使用されていたものであろう。SA 1から土器や石斧や小形土器、台石等が出土した。

各遺構の図面作成、写真撮影等の調査をすすめながら、層序に従って面的に掘削し、更に土坑4基(SC 6～9)と集石遺構1基(SI 7)を検出した。SC 7から勾玉や小玉、土器が出土した。なおSC 6・8・9は遺物や炭化物の出土が無く、明確な時期を特定することができなかった。検出面や埋土の観察からK-Ah層堆積以降の土坑であると考えられる。

遺物は、Ⅳ層とⅤ層を中心に調査区中央部分から北側に向けての出土が多く、攪乱土坑以外のK-Ah層残存範囲は比較的良好な堆積状況であった。

第2節 基本層序

3Tr周辺で土層堆積状況が異なる。3Trから北側の調査区では、K-Ah層が良好な状態で残存しており、Ⅰ層からⅧ層が堆積している。県道北方土々呂線が通る西側へ向けてやや傾斜し、南北へはほぼ水平な状態で堆積している様相であった。なお調査区の北側は道路改良工事によって削平されている。

3Trから南側の調査区はⅡ層からⅤ層がはっきりしない状態で堆積していた。南側に進むにつれて、Ⅳ層・Ⅴ層が混在した状態であるが、Ⅵ層以下の堆積状況は比較的良好であった。

基本層序及び各層の特色は以下のとおりである。

Ⅰ層 …黒褐色(Hue7.5YR3/1)。粘性やや強い。しまり弱い。

Ⅱ層 …にぶい橙色(Hue7.5YR6/4)。やや砂質感がある。しまり弱い。ふかふかしている。1mmから2mmのK-Ah粒子からなる二次堆積K-Ah層。SA 1及び攪乱土坑5基の検出面。

Ⅲ層 …褐色(Hue5YR6/8)。砂質感がある。しまり強い。細かいガラス粒子を含む。K-Ah層。

Ⅳ層 …にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)。粘性やや強い。しまり弱い。非常に細かい粒子で構成。一部1mm程度のK-Ahの粒子が混入。遺物包含層。SI 1～6検出面。

V a層…褐灰色(Hue7.5YR5/1)。粘性強い。しまり強い。均質。調査区東西ベルト周辺から北側のみに分布。遺物包含層。SI 7及びSC 6～9検出面。

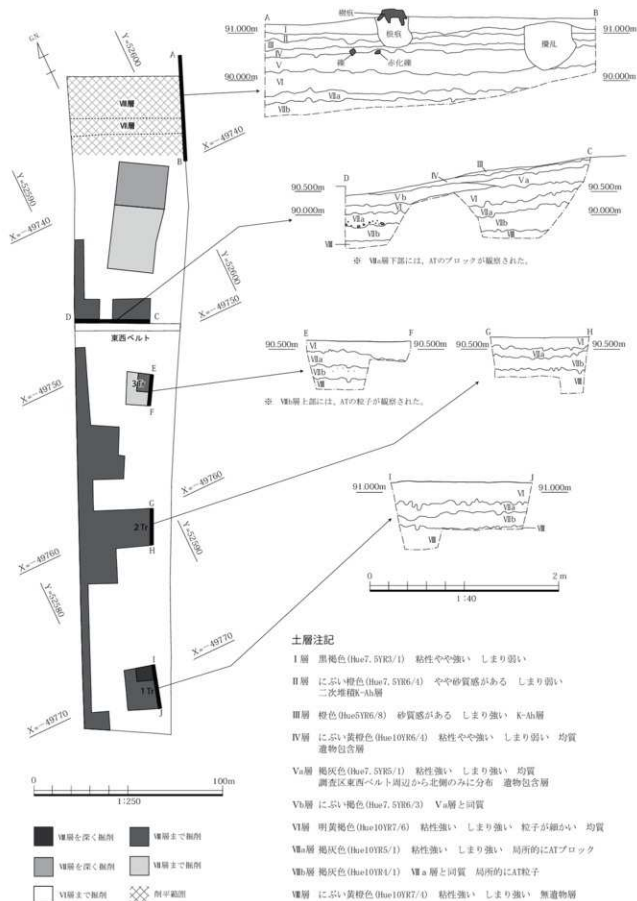
V b層…にぶい褐色(Hue7.5YR6/3)。Va層と同質。調査区西半より変色。

Ⅵ層 …明黄褐色(Hue10YR7/6)。粘性強い。しまり強い。粒子が細かい。均質。

Ⅶ a層…褐灰色(Hue10YR5/1)。粘性強い。しまり強い。1mm程度の白色粒子を含む。3Tr周辺部の下部において1mm以下の粒子から5cm程度のAT塊を含む。

Ⅶ b層…褐灰色(Hue10YR4/1)。Ⅶ a層と同質だが白色粒子を含まない。局所的に上層においてAT粒子を含む箇所がある。色調も顕著に黒色に近くなる。

Ⅷ層 …にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)。粘性強い。しまりが強い。礫なし。無遺物層。地山。



第3図 Tr配置図及び土層断面図

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺物

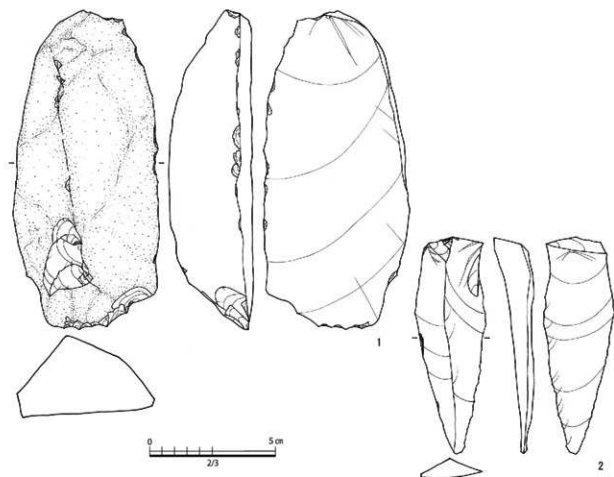
II～III層の漸移的な層及びIV層から出土した。層位は縄文時代早期以降に相当するが、より高所から流入したものと推測される。形状や特徴から後期旧石器時代の遺物と認定して本項に掲載する。

スクレイパー(第4図1)

頁岩製で厚手の縦長剥片を素材とした搔器である。剥片の末端部には、粗雑な二次加工を施して、スクレイパーエッジを形成している。背面はすべて自然面である。

石刃(第4図2)

白色に風化した流紋岩製の石刃である。打面調整は無く、頭部調整も顕著ではない。



第4図 石器実測図(旧石器時代)

第1表 石器観察表(旧石器時代)

編纂 番号	出土層位	出土位置	器種	石材	長 幅 厚 重				座標 (m)			観察所見
					(cm)	(cm)	(cm)	(g)	X	Y	Z	
1	Ⅱ～Ⅲ層	31r周辺	スクレイパー	頁岩	12.70	5.75	3.30	277.20	-49752.704	52589.779	90.594	末端部に粗雑な二次加工によるスクレイパーエッジ
2	Ⅳ層	31r周辺	石刃	流紋岩	8.60	2.80	1.55	20.80	-49752.033	52588.965	90.336	背面に2枚の割痕面

2 縄文時代の遺構

K-Ah層(III層)下位にあたり、縄文時代早期の包含層であるIV層からV層にかけて、7基の集石遺構が検出された。SI 2及びSI 4から炭化物が出土した。放射性炭素年代測定によれば、両遺構とも縄文時代早期と推定され、検出された包含層と整合する。

配石がある遺構が4基、配石が無い遺構が3基(流出した可能性が高い遺構1基を含む)に分類できる。なお、実測図のSI 1・2・4は断面図に加えて、配石及び上端・下端の見通し断面図も掲載している。

SI 1

1 Trの東側において、IV層からV層の漸移的な層から検出された。不定形な掘り込みに配石を配置している。上部の礫の赤化はあまり見られないが、配石は全て赤化し、ひび割れも散見される。集石遺構は非常に密に構成されており、埋土は極めて少なく、K-Ah層の土も混入しない。

SI 2

1 Trと2 Trの間の調査区の東側において、IV層からV層の漸移的な層で検出された。検出段階において、樹根により遺構上部が大きく攪乱されていた。一部の配石が露出していたが、遺構下部までは攪乱されておらず、原位置を保っている。掘り込みの上端は攪乱のため確定的ではないが、下端は、当時の掘り込みを保持していると思われる。

埋土は2層に分層することができる。上部は堆積土、下部は配石構築の際の土である。炭化物を多く包含していることから、火を用いた行為があったと考えられる。礫は全て赤化しており、下部によくつれて赤化が強くなり、ひび割れが入っている。

SI 3

調査区南端において、IV層からV層の漸移的な層から検出された。検出段階において、遺構上部は竹根によって一部攪乱されていたが、遺構の下部までは攪乱されておらず、原位置を保っている可能性が高い。赤化している配石もあり、ひび割れも散見されるが、明確な炭化物は確認できなかった。掘り込みは礫の下部を追って掘削したものの、地山との明確な相違が確認されず、必ずしも当時の掘り込みとは確定できない。

SI 4

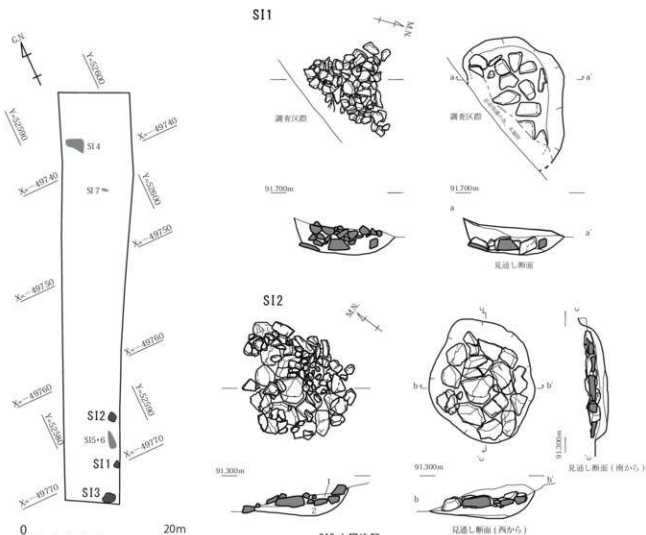
調査区北側の法面部分のIV層から検出された。検出段階では東側に向けて礫が散逸している状態であった。配石の西側には攪乱があったが、遺構下部への影響はなく、配石は原位置を保っている可能性が高い。配石上部の埋土には、炭化物の小粒子が多く包含されていた。

SI 5、6

SI 1及び2の間の調査区の東側において、IV層からV層の漸移的な層から検出された。SI 5は、検出段階で木根により大きく攪乱されていた。その影響で配石と思われる礫の移動が激しく、原位置を推定するのは難しい。掘り込みは礫の下部を追っての掘削によるもので、必ずしも当時の掘り込みとは確定できない。礫は全て赤化しており、炭化物の小粒子も包含していたが、木根も一部炭化していたため、検出はできなかった。SI 6は礫の出土が少ない調査区において一定のまとまりがあったため遺構と認定したが、掘り込みもなく、レベルも一定である。傾斜によって下方に流失したSI 5の礫が集積した可能性もある。

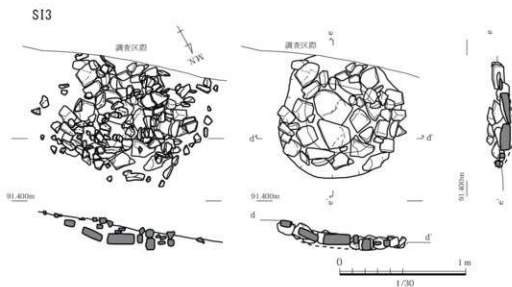
SI 7

竪穴建物跡(SA 1)南側のV層から検出された。拳大以上の礫があり、しみのような状態の焼土を伴う。



S12 土層注記

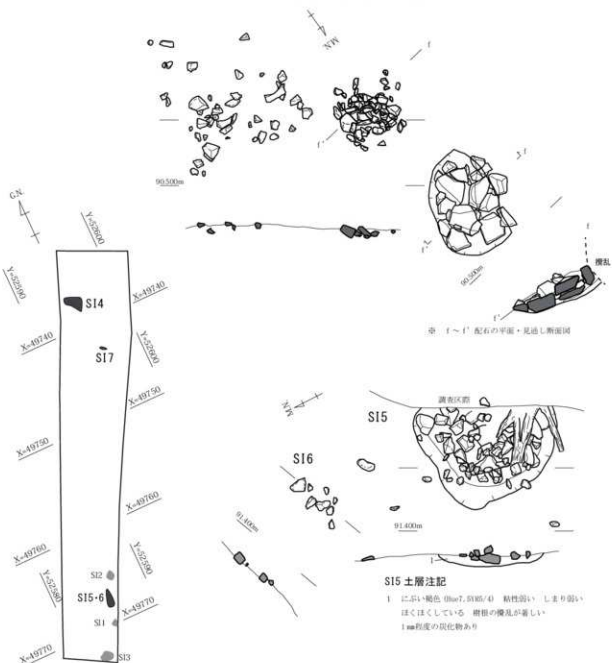
- ① 濃い橙色 (色7.5YR5/0) 粘性弱い、しまり弱い
1mmから1cm程度の炭化物を含む。層粒の擾乱が著しい
- ② 暗灰色 (色7.5YR4/1) 粘性やや強い、しまり強い
1mm程度の炭化物を多く含む



第5図 集石遺構実測図1 (S=1/30)

S14

※ 検出状況の平面・断面図 配石の反映無し



S15 土層注記
 1 にごい・褐色 (Blue7, 8) 粘り強い・しまり強い
 ほくほくしている 層間の境目が著しい
 1mm程度の炭化物あり



S17 土層注記
 1 明赤褐色 (Blue2, 5) 粘り強い・しまり強い



第6図 集石遺構実測図2 (S=1/30)

3 縄文時代の遺物

K-Ah層下位のIV層及びV層から出土した遺物に加え、早期以外の包含層や攪乱土坑から出土した遺物の中で、形状や特徴から縄文時代の遺物として認定したものは本項に掲載している。

燃糸文土器(第7図 3)

V層から出土した。深鉢の口縁部である。横方向に風化気味の燃糸文がみられる。

押型文土器(第7図 4～7)

全て深鉢である。4は底部付近で、楕円押型文が施文される。5及び6は胴部である。同心円押型文が施文される。接合しなかったが、同一の土器である可能性が高い。7は攪乱土坑から出土した。同心円文を施す手向山式土器の頸部付近か。

沈線文土器(第7図 8)

攪乱土坑から出土した。深鉢の胴部である。斜め方向の4条の沈線文がみられる。

晩期浅鉢・深鉢(第7図 9～14)

9はSA1の4層から出土した黒色磨研土器の浅鉢の胴部片である。穿孔がみられる。10はSA1の1層から出土した。口縁部片である。11はSA1の1層から出土した。深鉢で、弧状の沈線文がみられる。12は深鉢の胴部片であり、横方向の条痕文がある。13は攪乱土坑から出土した。深鉢か鉢の口縁部である。14は深鉢の胴部片である。外面の調整が粗い。

無刻目突帯文土器(第8図)

19を除いて全てSA1及びその周辺の攪乱土坑から出土している。いずれも口縁部に低い断面三角形の突帯がある。19はSC7周辺のII～III層から出土した。22は突帯上に縦位の浅く細かい刻目がみられる。

石鏃(第9図 26、27)

26は3TrのIV層から出土した。チャート製の鏃形鏃である。平面形態が二等辺三角形で、脚部が凹基である。先端部に折損がある。27はSA1の4層から出土した。緑色凝灰岩の剥片を素材とした石鏃である。平面形態は二等辺三角形だが左右非対称である。脚部の両端部に欠損がある。

石匙(第9図 28)

流紋岩の剥片を素材とした石匙と推測される。素材の主要剥離面と背面側から、粗雑な剥離によって整形している。両端部が欠損している。

二次加工剥片(第9図 29)

流紋岩の縦長剥片を素材とした二次加工剥片である。右側縁部に微細な二次加工が顕著である。

剥片(第9図 30)

砂岩の剥片である。上面に自然面を有し、右側縁部が欠損している。

石核(第9図 31)

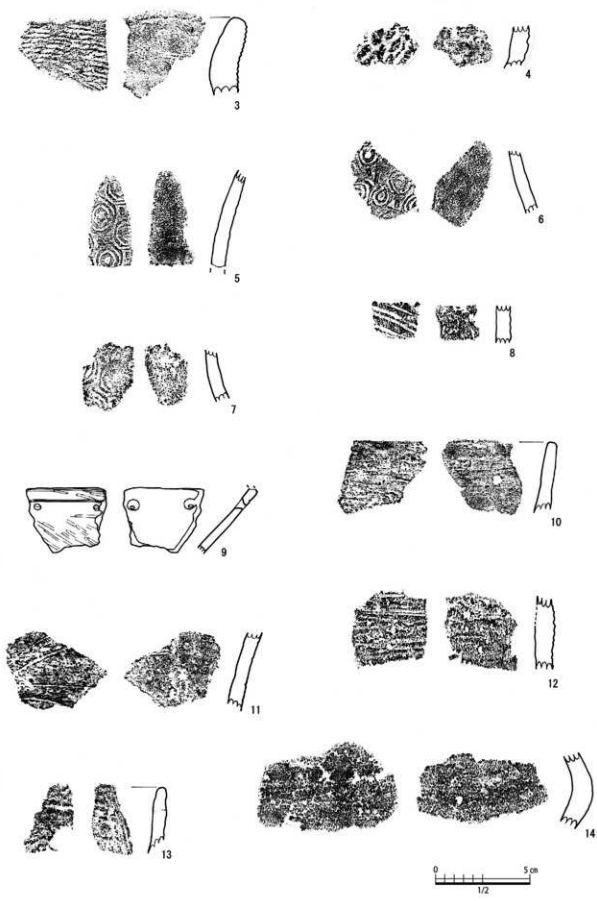
V層から出土した。黒色の頁岩を素材とした石核である。複数枚の剥片を剥離している。下半部は折損している。

礫器(第9図 32)

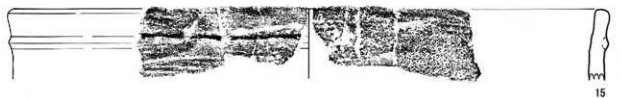
白色に風化した流紋岩を素材とした礫器である。礫の端部から粗雑な剥離によって刃部を作出している。

スクレイパー(第9図 33)

黒色の頁岩を素材とした残存部に鋸歯状の刃部をもつスクレイパーである。



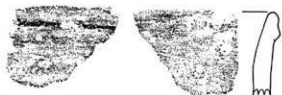
第7図 土器実測図(縄文時代) 1



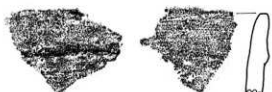
15



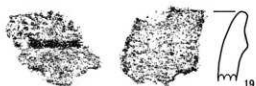
16



17



18



19



20



21



22



23



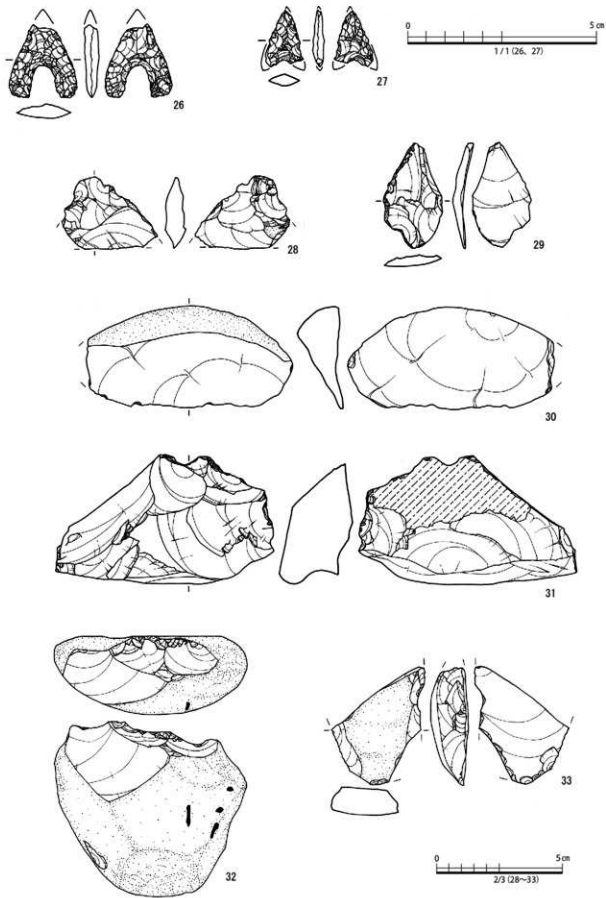
24



25



第 8 図 土器実測図(縄文時代) 2



第9圖 石器実測図(縄文時代)

第2表 土器観察表(縄文時代)

図録 No.	出土地点/ 層位	器種	部位	手法・調整・文様他		構成 形状	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
3	SA1 V層	深鉢	口縁	無文	指押さえあり ナデ	ヨコナデ	良好 明褐色 (Iue7.5YR5/6)	明褐色 (Iue7.5YR5/6)	2cm~1cmの赤角礫 微細な透明光沢 2cm以下の白色粒	外面が風化気味
4	3Iγ IV層	深鉢	底部	同心円型文	ナデ	—	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	灰黄褐色 (Iue10YR4/2)	2cm以下の白色粒 1cm以下の褐色粒、緑灰色粒	
5	埋土土坑	深鉢	胴部	同心円型文	ナデ	—	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR5/4)	にぶい黄褐色 (Iue10YR6/4)	1cm以下の赤黄褐色 微細な透明光沢、黄色光沢状針状 2cm以下の赤白、白、褐色粒	6と同-? 風化気味
6	埋土土坑	深鉢	胴部	同心円型文	ナデ	—	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR6/4)	にぶい黄褐色 (Iue10YR6/4)	1cm以下の赤黄褐色 微細な透明光沢、黄色光沢状針状 2cm以下の赤、白色粒	5と同-?
7	埋土土坑	深鉢	胴部	同心円型文	ナデ	—	良好 明黄褐色 (Iue10YR6/6)	明黄褐色 (Iue10YR6/6)	2cm以下の灰白色粒、褐色粒、灰色粒 2cm以下の黄色光沢粒、透明光沢粒	
8	埋土土坑	深鉢	胴部	斜め方向の 4線の点線文	斜め方向の ナデ	—	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	にぶい褐色 (Iue7.5YR5/3)	2cm以下の赤黄褐色、黄色光沢粒 2cm以下の赤白粒、微細な透明光沢粒 1cm以下の白色粒	
9	SA1 4層	深鉢	胴部	斜め方向にギガ 状線 穿孔 斜め方向にギガ 状線	ナデ	横方向の ナデ	良好 暗灰色 (Iue N3/)	にぶい黄褐色 (Iue10YR5/4)	1cm以下の灰白色粒 1cm以下のにぶい黄褐色	黄色磁研土層 内面に文様あり
10	SA1 1層	深鉢	口縁	横方向ナデ	横方向ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	2cm以下の黄色光沢針状、白色粒 3~6mmの白色粒	
11	SA1 1層	深鉢	胴部?	ナデ 縁の浅い波状文	ナデ	—	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR4/4)	明赤褐色 (Iue6YR5/6)	2cm以下の灰白色粒 2cm以下の褐色粒、褐色色粒	胴部か?
12	SA1埋込 層位不明	深鉢	胴部	横方向の 条線文 多色文	ナデ	—	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR4/2)	にぶい黄褐色 (Iue10YR4/2)	2cm以下の黄色光沢針状、白色粒 微細な透明光沢粒	外面が風化気味
13	埋土土坑	深鉢?	口縁	ナデ	横方向の ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	黄褐色 (Iue7.5YR5/1)	2cm以下の白色粒、赤粒 2cm以下の黄色光沢針状、透明光沢粒	
14	SA1埋込 表土	深鉢	胴部	ナデ	指押さえ ナデ	—	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/3)	暗灰色 (Iue7.5YR4/4)	2cm以下の赤白、灰色粒 微細な透明光沢粒	外面が調整粗い
15	SA1 1層	深鉢	口縁	突帯文 横方向ナデ	ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	2cm以下の黄色光沢針状 微細な透明光沢粒 2cm以下の白色、褐色色粒	口縁1.2cm(確定) 合成磁土 検出率約1/1
16	SA1 1層	深鉢	口縁	突帯文 横方向ナデ	ナデ	ヨコナデ	良好 灰黄褐色 (Iue10YR4/2)	にぶい黄褐色 (Iue10YR4/2)	2cm以下の黄色光沢針状 微細な透明光沢粒 2cm以下の白色粒	
17	SA1 2層	深鉢	口縁	突帯文 横方向ナデ	ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	1.5cm以下の黄色光沢針状 微細な透明光沢粒 2cm以下の白色粒	内面が 一部風化
18	埋土土坑	深鉢	口縁	突帯文 横方向ナデ	横方向ナデ	ナデ	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR5/4)	にぶい黄褐色 (Iue10YR7/4)	2cm以下のにぶい黄褐色粒 4mm以下の灰黄褐色粒、灰色粒 2cm以下の黄色光沢粒、透明光沢粒	外面に スス付着
19	SA1 1層	深鉢	口縁	横方向ナデ 突帯文 横方向ナデ	ナデ	ナデ	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR7/4)	にぶい黄褐色 (Iue10YR5/4)	2cm以下の白色粒 2cm以下の黄色光沢粒 2cm以下の透明光沢粒	
20	SA1 1層	深鉢	口縁	ナデ 突帯文 横方向ナデ	横方向のナデ	ヨコナデ	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR6/4)	にぶい黄褐色 (Iue10YR7/4)	4cm以下の灰白色粒 1cm以下の白色粒 2cm以下の褐色粒	
21	SC7埋込 E~Ⅱ層	深鉢	口縁	無刺目突帯文 指押さえ ナデ 横方向ナデ	指押さえ ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR6/4)	にぶい黄褐色 (Iue10YR6/4)	2cm以下の黄色光沢針状、粒状 1mm以下と微細な透明光沢粒 2cm以下の白色粒	
22	SA1 1層	深鉢	口縁	突帯文 横方向ナデ 一部黄褐色	ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR5/4)	にぶい黄褐色 (Iue10YR6/4)	2cm以下の黄色光沢針状、粒状 微細な透明光沢粒 1cm以下の白色粒	突帯上に細く 透い刺みあり
23	SA1埋込 表土	深鉢	口縁	突帯文	ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	2cm以下の黄色光沢針状 2cm以下の白色粒	外面の 風化が著しい
24	SA1 表土	深鉢	口縁	突帯文 ナデ	ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	にぶい褐色 (Iue7.5YR5/4)	2cm以下の黄色光沢針状、粒状 1cm以下の白色粒	全体の風化
25	SA1埋込 層位不明	深鉢	口縁	横方向ナデ 突帯文	ナデ	ヨコナデ	良好 にぶい黄褐色 (Iue10YR5/4)	にぶい黄褐色 (Iue10YR5/4)	2cm以下の黄色光沢針状 微細~1mm以下の透明光沢粒	

第3表 石器観察表(縄文時代)

図録 番号	出土層位	出土位置	器種	石材	長 幅 厚 重				厚積(m)			観察所見
					(cm)	(cm)	(cm)	(g)	X	Y	Z	
26	IV層	3Iγ	石鏃	チャート	1.90	1.80	0.35	0.90	—	—	—	鏃断面、先端部に欠損
27	4層	SA1	石鏃	緑色凝灰岩	1.50	1.00	0.30	0.34	—	—	—	鏃断面の高橋部に欠損
28	1層	SA1	石鏃	流紋岩	2.75	3.50	0.85	8.40	—	—	—	主要割断部と背割部から筋割で磨削
29	V層	SA1埋込	二次加工断片	流紋岩	4.20	2.30	0.85	3.50	-49.741.513	95.190	90.190	右側割断部と微細な二次加工が顕著
30	V層	SA1埋込	断片	砂岩	4.10	8.20	1.80	50.40	-49.740.099	92.956.763	90.370	上面に割断面、右側筋割に欠損
31	IV層	3Iγ埋込	石核	頁岩	5.10	8.70	2.90	127.70	-49.753.134	92.992.291	90.797	複数枚の断片を割断
32	V層	3Iγ埋込	破砕	流紋岩	6.95	7.65	3.10	182.80	-49.745.085	92.956.106	90.320	筋割部から筋割で磨削で刃部を作出
33	2層	SA1	スクレイパー	頁岩	4.70	3.05	1.50	25.40	-49.745.827	92.954.217	90.562	筋割状の刃部

4 弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の遺構

II層からIV層面において、竪穴建物跡(SA1)1軒、土坑3基(P1、P2、SC7)が検出された。遺物はSA1から土器や石斧などの石器などが出土した。またSC7からは勾玉、小玉、土器の小片が出土した。

SA1

調査区北部において、III層上面から検出された。検出段階で埋土が殆ど失われており、住居面南端部の一部を残し大きく削平されていた。また攪乱土坑によって中央部と北西部が大きく失われているため残存状況が悪い。規模は、南北に約6.8m、東西に約4.4mであり、住居の形状は方形または隅丸方形と推定される。貼床面には、遺物とともに下層への帰属と推定される赤化礫も含まれていた。

住居の西側から南側にかけてL字状のベッド状遺構がある。土層観察の結果から、このL字状遺構の端部の不定型な掘り込みはSA1に関連するものである。床面中央は、K-Ahを混入させた10～15cm程度の貼り床を施し、上面は固く締まっている。中央部北側に焼土を伴う中央炉と推定されるものが設置されている。SA1のL字状のベッド状遺構の南端には、掘り込みがあったが、深さが10cm程度であり、柱穴かどうかは判断しがたい。

なおSA1出土の炭化物の放射性炭素年代測定では、弥生時代後期から古墳時代初頭という結果が得られており、後述する出土遺物と整合する。

P1、P2

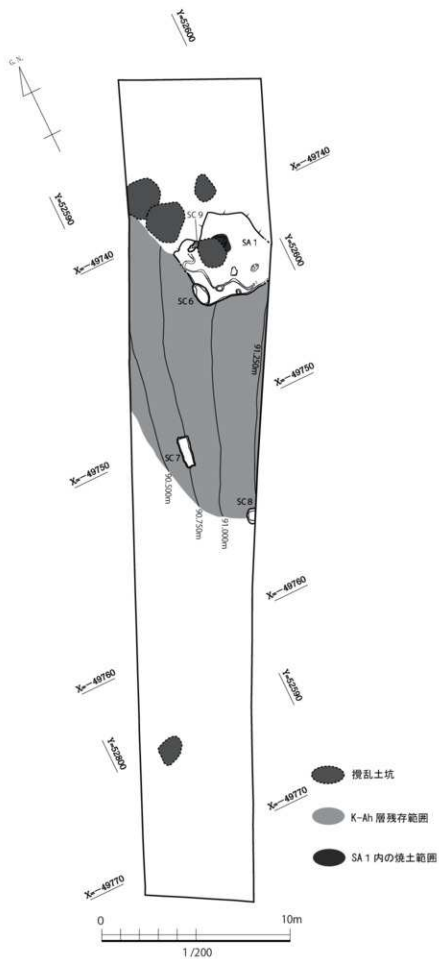
SA1の南側において、III層上面で検出された。P1は東西に約40cm、南北に約36cmの楕円形状の掘り込みであり、深さは約8cmである。P2は東西に約48cm、南北に約30cmの楕円形状の掘り込みであり、深さは西側がやや浅く約6cmで、東側は約18cmであった。P1、P2ともに底面最深部のレベルは、ほぼ同じであり、土層も同質であることから、同時期の土坑である可能性が高い。しかし、遺物を含まず、SA1との関連は確定できない。

SC7

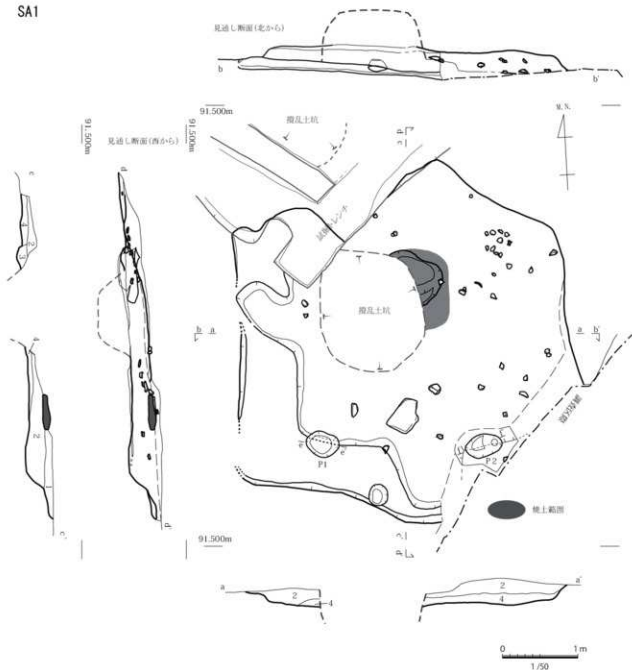
調査区中央部やや西側において、V層面で検出された。検出段階で遺構を扶むように北側と南側に木根があり、遺構北部には木根が侵入していたため、段構造の有無は確認できなかった。ほぼ南北に沿う平面長方形の遺構であり、南北に約160cm、東西に約55cm、検出面からの深さは約55cmの規模である。

堆積状況は、1層から4層は多少の起伏があるが、ほぼ水平的に堆積している。4層は粘性が強く、固くしまり、掘り込みの傾斜を補正するように水平的に貼床を施した印象であった。5a層、5b層、5c層は遺構の壁面に沿うように堆積している。5a、5b層は、K-Ah粒子が入るか入らないかの違い以外は同質である。5c層は5a、b層とほぼ同質だが、しまり、粘性ともに強い。

出土遺物は、1層から4層にかけて土器の小片、1層の中央部から勾玉が出土した。また4層からフローテーションによって小玉が出土した。特筆すべき点として、3層から出土した土器片一つが、SA1の小形甕と接合していることがあげられる。出土遺物と遺構の形状からSA1と同じく弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての遺構であり、木棺墓であったと考えられる。5a層・5b層・5c層は棺の木板部である可能性がある。しかし、5a層及び5c層は20cm程度の厚さがあった。樹根の侵入による影響も否定できない。



第 10 図 K-Ah 層残存範囲と遺構分布図



SA1 土層注記

- 1 にぶい・橙色 (Iloer7, 5106/4)
- 2 にぶい・橙色 (Iloer7, 5106/3)
- 3 にぶい・赤褐色 (Iloer7, 5105/4)
- 4 灰褐色 (Iloer5105/2)

しまり強い、やや砂質感がある。ふかふかしている。全体的に二次K-Ahで構成。1mmから3mm程度のK-粒粒子を含む。1層と同質だが、やや暗く、K-粒粒子を含まない。

しまり強い。粘性やや強い。1mmから3mmの地上機と1mm程度の炭化物を多く含む。中央が硬土。上面のしまりが強い。粘性強い。1cmから5cmのアカホヤ根を多く含む。基床層。

P1

91.500m



P2

91.500m

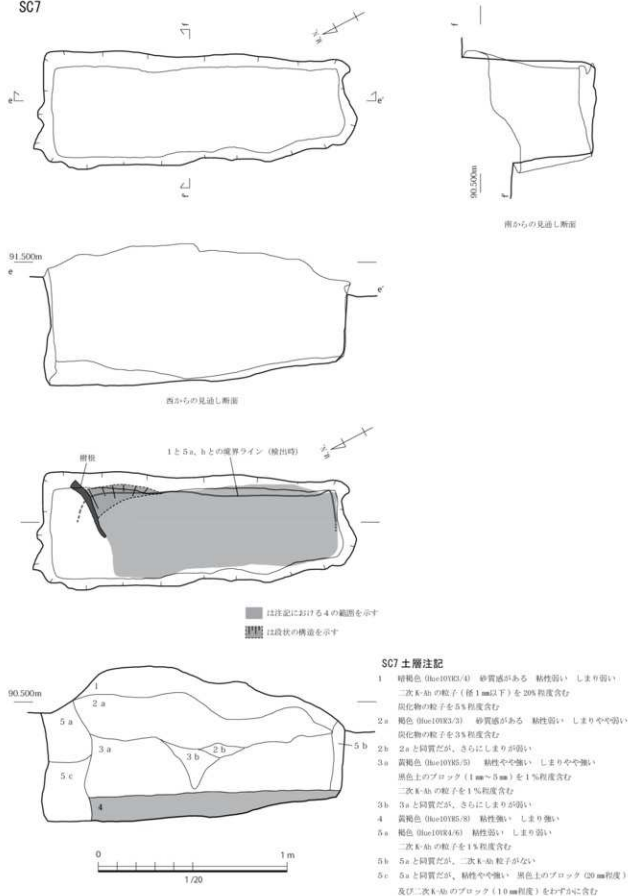


P1及びP2土層注記

- 1 灰褐色 (Iloer7, 5104/2) しまり強い。粘性やや強い。均質
- 2 褐色 (Iloer7, 5104/1) しまり強い。粘性強い。均質

第11図 竪穴建物跡及びP1・P2実測図

SC7



第12図 SC7 実測図

5 弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の遺物

壺(第13図・第14図 45、47)

34はSA1から出土した。口縁部から頸部である。壺の可能性もある。接合しなかったが、35と同一のものである可能性がある。35は攪乱土坑から出土し、36～44はSA1から出土した口縁部である。45はSC7の3層から出土した口縁部である。外面にススが付着している。47はSA1の1層から出土した底部である。残存率は約1/8で、底径は約7.2cmと推定される。

鉢(第14図 46)

SA1の1層から出土した。鉢の口縁部である。外面にススの付着がある。

小形土器(第14図 48、49)

SA1の1層から出土した。48は小形甕である。残存率は約3/5であり、口径7.7cm、器高7.3cm、底径3.9cmである。なおSC7の3層から出土した土器片と接合した。49はSA1の1層から出土した小形壺である。底部はほぼ完形である。底径は3.2cmである。

壺(第14図 50～54・第15図)

50から53は口縁部から頸部及び胴部までの破片である。SA1から出土した。50は口縁部の残存率は約1/4で、口径は13.5cmと推定される。51は口径が12.2cmと推定される。52は口縁部の残存率は約1/6で口径は11.4cmと推定される。53は口縁部の残存率が約1/6、頸部が約1/2であり、口径が約11.4cm、頸部径が約9cmと推定される。54は頸部から胴部付近である。SA1の1層から出土した。55はSC7の東側、II～III層から出土した。頸部から胴部付近である。外面にススが付着している。56はSA1周辺の攪乱土坑から出土した。頸部付近の胴部である。接合しなかったため、確定できないが、上記の34、35と同一のものである可能性も否定できない。その場合、34、35は壺になる。57はSA1の1層から出土した胴部である。残存率は約1/2弱で外面にススの付着、内面に一部風化とススの付着がある。58はSA1の1層から出土した胴部から底部である。底部の残存率は約1/3で、平底の底径は4.8cmと推定される。59は確認調査で出土した胴部から底部である。平底の底部はほぼ完形である。60、61、62はSA1の1層から出土した底部である。なお60は丸底であり、61は外面に一部ススの付着がある。

高坏(第16図)

SA1から出土した。63は高坏の坏部である。口径は20.6cmと推定される。64は高坏の充填部である。

磨製石斧(第17図 65)

SA1の4層から出土した。ホルンフェルス素材とした磨製石斧である。剥離調整によって平面台形に形状を整え、その後研磨している。刃部周辺に刃線と並行する擦痕が顕著である。

台石(第17図 66)

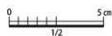
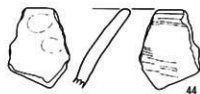
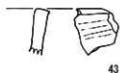
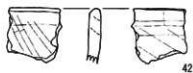
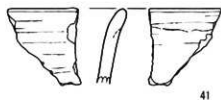
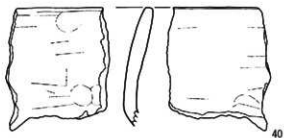
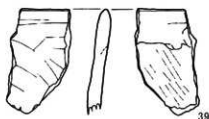
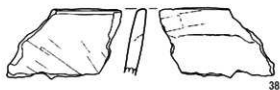
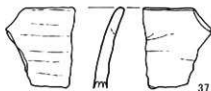
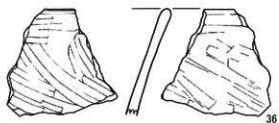
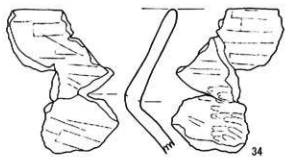
SA1の2層から出土した。砂岩を素材とした台石である。使用面に凹部を確認できる。

勾玉(第17図 67)

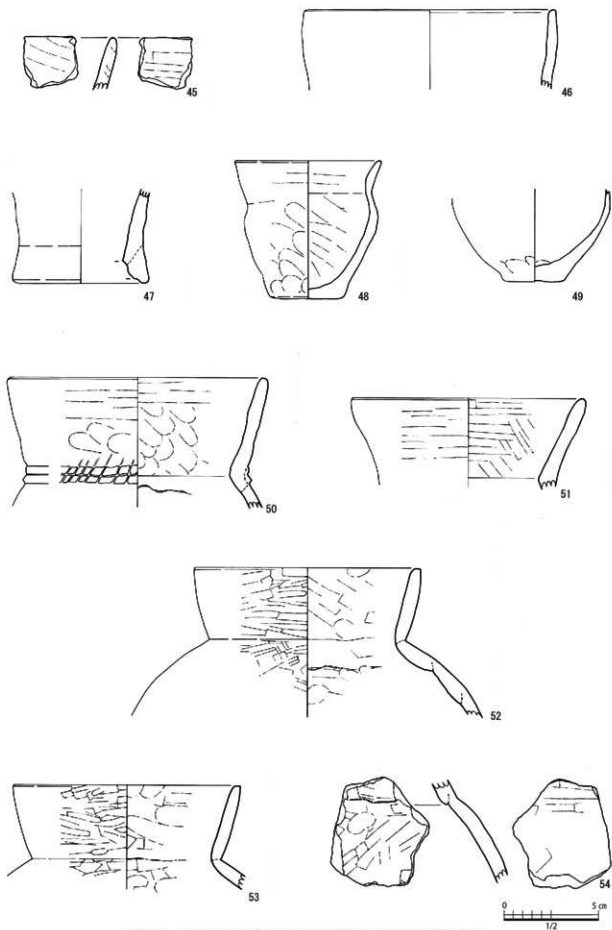
SC7の1層から出土した。緑色凝灰岩を素材とした勾玉である。

小玉(第17図 68)

SC7の4層土を採集して行ったフローテーションによって検出した。勾玉と同石材の緑色凝灰岩を素材とした小玉である。



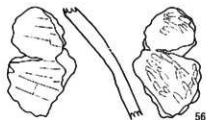
第13図 土器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭) 1



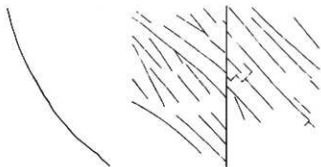
第14図 土器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭) 2



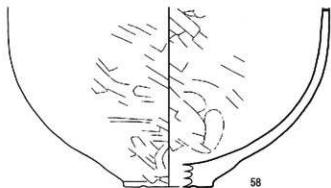
55



56



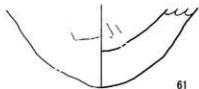
57



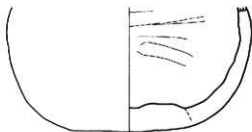
58



60



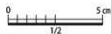
61



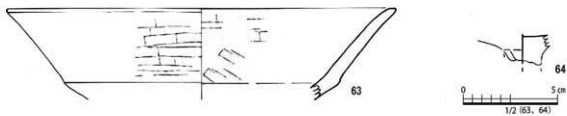
59



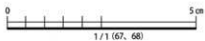
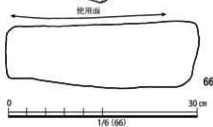
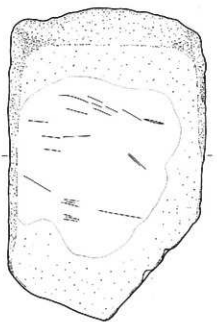
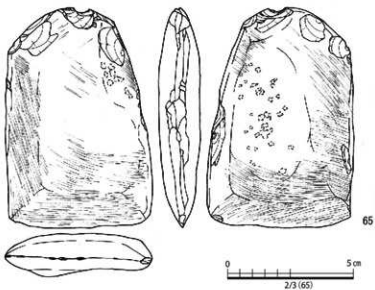
62



第15図 土器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭) 3



第16図 土器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭) 4



第17図 石器実測図(弥生時代後期後葉から古墳時代初頭)

第4表 土器観察表(弥生時代後期後葉から古墳時代初葉)

編年	出土位置	種別	部位	形状	平正・調整・文様	方向	破損	色	色調	胎土	備考
34	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	指押さえた後、横方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	3m以下の白・灰・褐色層 2m以下の褐色光沢状 微細な透明光沢	30、56と同一?
35	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	3m以下の白・灰・褐色層 2m以下の褐色光沢状 微細な透明光沢	34、58と同一?
36	SA1	腰	口縁	横方向のナデ	横方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい褐色 (Shu7.5YR7/4)	褐色 (Shu7.5YR7/4)	4m以下の灰白色 2m以下の褐色光沢 微細な透明光沢	外面にスス付着
37	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	3m以下の白・灰・褐色層 2m以下の褐色光沢 1m以下の褐色層	外面に一部スス付着
38	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向のナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	3m以下の黄褐色・褐色層 2m以下の灰白色層	酸化層付着により外面の調整不揃
39	SA1	腰	口縁	横方向のナデ	横方向の工具ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	4m以下の灰白色 2m以下の褐色光沢 1m以下の褐色層	外面にスス付着
40	SA1	腰	口縁	横方向のナデ	横方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	褐色 (Shu7.5YR7/6)	4m以下の灰白色 2m以下の褐色光沢 1m以下の褐色層	外面にスス付着
41	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	ナデ	良好	淡黄色 (Shu2.5Y 8/3)	淡黄色 (Shu2.5Y 8/3)	6m以下の灰白色 2m以下の褐色光沢・褐色層 2m以下の褐色光沢	
42	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	微細な透明光沢 1~4mmの赤・褐色の粒	外面にスス付着
43	SA1	腰	口縁	斜め方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	褐色 (Shu7.5YR4/3)	褐色 (Shu7.5YR4/3)	微細な透明光沢 1mm以下の赤・褐色の粒	内面に黄化斑
44	SA1	腰	口縁	スス付着	指押さえた後 ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	褐色 (Shu7.5YR6/6)	3m以下の黄褐色・灰白色・褐色層	
45	SC7	腰	口縁	横方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	微細な褐色土質、透明光沢	外面にスス付着
46	SA1	腰	口縁	ナデ? (黄化斑?)	横方向のナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/2)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/2)	3m以下の白・灰・褐色層 1m以下の褐色光沢 2m以下の褐色光沢	口縁部の約1/4 口径13.1cm(推定)
47	SA1	腰	底部	粘土のつなぎ目	ナデ	ナデ	良好	にがい褐色 (Shu7.5YR5/4)	にがい褐色 (Shu7.5YR5/4)	2m以下の黄褐色・白褐色層 微細な透明光沢	残存率約1/5 底径7.2cm
48	SA1	小形蓋口縁	口縁	横方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	2m以下の褐色光沢状 2m以下の黄褐色・褐色層 微細な透明光沢	残存率約1/5 口径7.7cm 蓋径7.3cm 底径1.9cm
49	SA1	小形蓋胴部	胴部	指押さえた後ナデ	ナデ(一部黄変)	ナデ(一部黄変)	—	にがい黄褐色 (Shu7.5YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu7.5YR7/4)	3m以下の褐色 2m以下の褐色光沢状 微細な透明光沢	
50	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	3m以下の白・灰・褐色層 2m以下の褐色光沢 1m以下の褐色層	口縁部の残存率 約1/4 口径13.5cm(推定)
51	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	3m以下の白・褐色層 2m以下の褐色光沢 微細な透明光沢	口径12.2cm
52	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	指押さえた後、斜め方向の工具ナデ	ナデ	良好	淡黄色 (Shu2.5YR7/3)	淡黄色 (Shu2.5YR7/3)	6m以下の灰白色 4m以下の褐色光沢 2m以下の褐色光沢	外面にスス付着が顕著
53	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	ナデ	良好	淡黄色 (Shu2.5YR7/3)	淡黄色 (Shu2.5YR7/3)	6m以下の灰白色 2m以下の褐色層 4m以下の褐色層	口径11.4cm(推定) 蓋部径6.3cm(推定) 底径 約1/2
54	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	6m以下の褐色層・灰白色 2m以下の褐色光沢 2m以下の褐色層	外面にスス付着
55	SC7	腰	口縁	横方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	4m以下の灰白色 2m以下の褐色光沢	外面にスス付着
56	腰	口縁	口縁	横方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	3m以下の白・灰・褐色層 2m以下の褐色光沢 微細な透明光沢	34、35と同一?
57	SA1	腰	口縁	斜め方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	灰褐色 (Shu10YR7/2)	4m以下の白・灰・褐色層 微細な透明光沢	外面・内面にスス付着
58	腰	口縁	口縁	斜め方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	6m以下の白・灰白色 2m以下の褐色層 2m以下の褐色光沢	底径 約1/3 底径 4.1cm(推定)
59	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	ナデ	良好	褐色 (Shu7.5YR6/6)	褐色 (Shu7.5YR6/6)	5m以下の灰褐色・灰白色 4m以下の褐色層 2m以下の褐色光沢 1m以下の褐色層	胴部 約1/4 底径 ほぼ定数 胴部最大寸13cm 底径6.6cm
60	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/4)	3m以下の白・灰・褐色層 2m以下の褐色光沢 1m以下の褐色層	丸底
61	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	2m程度の白・灰・褐色層 2m以下の褐色光沢 微細な透明光沢	
62	SA1	腰	口縁	横方向の工具ナデ	斜め方向の工具ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	3m以下の白・灰・褐色層 微細な透明光沢	外面に一部スス付着
63	SA1	高坏	外周	横方向のナデ	横方向の工具ナデ	ヨコナデ	良好	褐色 (Shu7.5YR7/6)	にがい褐色 (Shu7.5YR7/6)	3m以下の白・灰・褐色層 1m以下の褐色層 微細な透明光沢	口径20.6cm(推定)
64	SA1	高坏	外周	粘土のつなぎ目	ナデ	ナデ	良好	にがい黄褐色 (Shu10YR7/3)	淡黄色 (Shu10YR8/3)	4m以下の白・灰・褐色層 3m以下の褐色光沢 微細な透明光沢	

第5表 石器観察表(弥生時代後期後葉から古墳時代初葉)

編年	出土位置	出土位置	種別	石材	長	幅	厚	重	厚薄 (%)	X	Y	Z	観察所見
65	4層	SA1	磨石	ホルンフェルス	0.75	0.85	1.65	139.40	—	—	—	—	断面に凹凸
66	2層	SA1	磨石	砂岩	40	31	10	60	2410.00	—	—	—	使用面に凹部
67	1層	SC7	勾玉	緑色結晶岩	1.45	0.95	0.35	73.00	—	—	—	—	水磨痕と磨されぬ面から出土
68	4層	SC7	小玉	緑色結晶岩	0.40	0.40	0.20	0.74	—	—	—	—	SC7からフローテーションにより出土

第4節 自然科学分析の結果

延岡市上三輪町に所在する上三輪小切畑第1遺跡では、斜面部より縄文時代早期の集石遺構や、弥生時代後期後葉の竪穴建物跡、木棺墓と推定される土坑が検出されている。

各遺構の年代や当時の食生活等を確認するため、遺構内から出土した炭化材及び種実同定を対象として放射性炭素年代測定を実施した。

1 放射性炭素年代測定

① 試料

試料は、木棺墓と推測される土坑(SC7)、竪穴建物跡(SA1)、集石遺構(SI2およびSI4)から出土した炭化材4点(資料1～4)であり、いずれも小破片である。なお、各試料の詳細は、測定結果と共に第6表に記した。

② 分析方法

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は、1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

第6表 放射性炭素年代測定結果

地区 遺構	種類	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果			Code No		
						測定	cal BC/AD	cal BP		相対比	
資料1 SA1 覆土 C-1	炭化材 (広葉樹の節)	AAA	1,640±20	-27.81 ± 0.45	1,790±20 (1,790±24)	σ	cal AD 174 - cal AD 192	cal BP 1,776 - 1,758	0.116	IAAA- 130601	
							cal AD 211 - cal AD 257	cal BP 1,739 - 1,693	0.613		
							cal AD 285 - cal AD 287	cal BP 1,665 - 1,663	0.018		
							cal AD 295 - cal AD 321	cal BP 1,655 - 1,629	0.251		
							2σ	cal AD 137 - cal AD 260	cal BP 1,813 - 1,690		0.738
							cal AD 279 - cal AD 326	cal BP 1,671 - 1,624	0.262		
資料2 SC7 3層	炭化材 (未同定)	AAA	850±20	-26.45 ± 0.50	830±20 (829±23)	σ	cal AD 1,191 - cal AD 1,190	cal BP 759 - 752	0.288	IAAA- 130602	
							cal AD 1,204 - cal AD 1,250	cal BP 746 - 700	0.012		
							2σ	cal AD 1,168 - cal AD 1,257	cal BP 792 - 693		0.294
							cal BC 8,559 - cal BC 8,434	cal BP 10,508 - 10,383	0.924		
資料3 SI2 覆土 C-1	炭化材 (カエデ属)	AAA	9,300±40	-27.69 ± 0.47	9,250±40 (9,253±27)	σ	cal BC 8,367 - cal BC 8,353	cal BP 10,316 - 10,302	0.076	IAAA- 130600	
							cal BC 8,603 - cal BC 8,582	cal BP 10,552 - 10,531	0.031		
							cal BC 8,575 - cal BC 8,332	cal BP 10,524 - 10,281	0.969		
							2σ	cal BC 8,715 - cal BC 8,624	cal BP 10,664 - 10,573		1.000
資料4 SI4 覆土	炭化材 (広葉樹の節)	AAA	9,430±30	-27.81 ± 0.44	9,390±40 (9,388±35)	σ	cal BC 8,715 - cal BC 8,624	cal BP 10,664 - 10,573	1.000	IAAA- 130609	
							2σ	cal BC 8,752 - cal BC 8,570	cal BP 10,701 - 10,519		1.000

1) 処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。

2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

4) 付記した誤差は、測定誤差の測定値の66%が入る範囲(各年代値に換算した値)。

5) 暦年の計算には、SHALOCAROL CAL1807(DR) PDB標準 CAL 12 4265 ©Copyright 1996-2010 van Steiner and PJ Reimer)を使用した。

6) 暦年の計算には、補正年代に1)で暦年較正用年代として得た、一桁目を含める前の値を使用した。

7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線の暦年較正プログラムが改正された場合の再計算の比較が行われていないように、暦年較正用年代は1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。

9) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

③ 結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を第6表、暦年較正曲線図を第18図に示す。補正年代は、資料1 (SA1 覆土の炭化材)が1,790±20BP、資料2 (SC7の3層の炭化材)が830±20BP、資料3 (SI2 覆土の炭化材)が9,250±40BP、資料4 (SI4 覆土の炭化材)が9,390±40BPである。また、補正年代に基づく暦年較正結果(2σの確率1)は、資料1がcal AD137-260、資料2がcal AD1,168-1,257、資料3がcal BC8,575-8,332、資料4がcal BC8,752-8,570である。

なお、資料2を除く3点については、測定試料を採取した後に同定可能な大きさの炭化材が残ったことから、樹種同定を併せて実施した。同定結果は、年代測定結果と共に第6表に記した。資料1は広葉樹の節部分で、樹種は不明である。資料3はカエデ属に同定された。資料4は広葉樹の節部分で、樹種は不明である。

また、資料1と資料2の予備試料について樹種同定を行った結果、資料1のC-2にはクリ、C-3にはヒサカキ、C-4にはコナラ節が、資料2の2層にはスダジイ、下層(中央)にはサカキの炭化材が認められた。

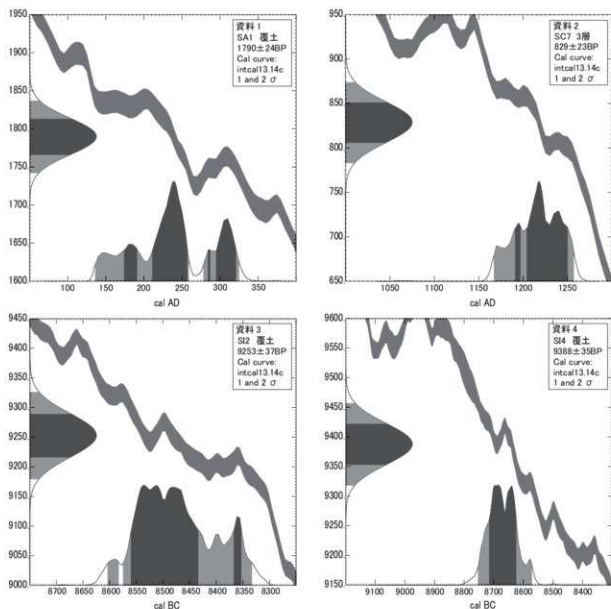
④ 考察

SA1は、弥生時代後期後葉～古墳時代初期の堅穴建物跡と考えられている。炭化材の年代値は、補正年代で1,790±20BPとなり、暦年較正結果(2σの確率1)はcal AD137-260であった。この結果から、弥生時代後期の炭化材と考えられ、SA1の推定年代とも概ね整合する。

SC7は、弥生時代後期後葉の木棺墓と推測される。炭化材は、3層から出土しており、補正年代で830±20BP、暦年較正結果はcal AD1,168-1,257であった。この結果から、炭化材は平安時代末～鎌倉時代前半の可能性が。推定年代よりも大幅に新しい年代を示すことから、覆土堆積時あるいはその後の攪乱等により、後代の炭化材が混入したことが考えられる。

SI2とSI4は縄文時代早期の集石遺構であるが、SI4では炭化材の近くから縄文時代晩期の土器も出土し

ている。炭化材の補正年代は、SI 2 が $9,250 \pm 40\text{BP}$ 、SI 4 が $9,390 \pm 40\text{BP}$ を示すことから、両遺構とも縄文時代早期と考えられる。SI 2 と SI 4 では補正年代で140年の年代差があるものの、比較的近い時期に作られ、SI 4 よりも SI 2 が若干新しい可能性が考えられる。



第18図 暦年較正曲線図

2 種実遺体の同定

① 試料

試料は、SA1 (資料5)のA区a 貼床、A区b 貼床、A区c 貼床、A区d 焼土、B区c 焼土、D区a、D区b 貼床と、SC7 (資料6)の2層、3層から出土した種実遺体10試料である。各試料には、種実遺体・炭化材等(1~22個)がブラケースに入っており、全て乾燥した状態である。

② 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を拾い出す。種実遺体

の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間には、ハイフォンで結んで示す。分析後は、種実遺体を容器に入れて返却する。

③ 結果 - 炭化種実出土状況 -

第7表に種実同定結果を示す。木本4分類群(広葉樹で常緑高木のヤマモモ?、イチイガシ、アカガシ亜属、常緑または落葉高木のコナラ属、コナラ属-常緑高木のシイ属)8個、草本2分類群(タデ属、マメ科(ダイズ類?))11個、計19個の炭化種実が抽出・同定された。その他に、2個は状態が不良の炭化物で同定ができず、不明としている。種実以外では、炭化材が81個、地下茎が2個、菌核が4個、岩片が1個の、計88個が確認された。

以下に、炭化種実の出土状況を述べる。

④ SA1

栽培種の可能性を含むマメ科(ダイズ類?)の種子が、A区b 貼床から2個、A区c 貼床から1個、B区c 焼土から2個、D区aから1個の、計6個が確認された。その他に、草本のタデ属の果実が、D区aから4個、D区b 貼床から1個の、計5個が確認された。A区a 貼床、A区d 焼土からは、種実は確認されなかった。

⑤ SC7

3層からは、ヤマモモの核?の破片が1個確認された。2層からは、アカガシ亜属の殻斗の破片が2個、イチイガシの子葉の破片が2個、コナラ属の子葉の破片が2個、コナラ属-シイ属の子葉の破片が1個の、計7個が確認された。

⑥ 炭化種実の記載

本分析で確認された種実遺体は全て炭化しており、保存状態は極めて不良である。各分類群の写真を第19図に示し、以下に形態的特徴等を述べる。

ヤマモモ(*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

核(内果皮)は、完形ならば、径6~9mm、厚さ5~7mmの歪でやや扁平な非対称広楕円体で、半割した内面は平滑で種子1個が入る径5~7mmの広卵状で頂部が尖る窪みがある。内果皮は硬く緻密で、表面には微細な網目模様があり粗面。出土種実は、炭化しており黒色、縫合線に沿って割れた半分未満の破片で、半割面に頂部が尖る窪みが確認される。残存径は3.7mmを測る。

イチイガシ(*Quercus gilva* Blume) ブナ科コナラ属アカガシ亜属

子葉は炭化しており黒色。完形ならば、長さ1~1.3cm、径0.8~1cm程度の楕円~広卵体。破片は2個とも2枚からなる子葉の合わせ目に沿わずに割れており、最大片の残存長は13.0mm、残存径は6.2mmを測る。

子葉には著しい異形性(岡本, 1979)がみられ、合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部にある小さな孔(主根)を欠損する。

なお、イチイガシの特徴が明瞭に確認されない破片をコナラ属(*Quercus*)としているが、おそらくイチイガシに由来すると思われる。また、残存長4.1mm、残存径4.9mm、半分厚2.6mmと小型の子葉の破片には、シイ属(*Castanopsis*)に由来する可能性も含まれるため、コナラ属-シイ属としている。

アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属

果実基部を包む殻斗は炭化しており黒色、残存径0.7cmの椀状。木質で、表面に4～6段の輪状紋がある。

タデ属(*Polygonum*) タデ科

果実は炭化しており黒色、長さ1.9～2.0mm、幅1.4～1.5mm、厚さ1.0～1.1mmのやや扁平な広卵体。頂部はやや尖り、花柱基部が残る個体もみられる。果実基部は切形。果皮表面は粗面で微細な網目模様があり、断面は櫛状。

マメ科(*Leguminosae*)

種子は炭化しており黒色、長さ6.7mm、幅4.4mm、残存厚3.6mm(SA1:B区c 焼土)と、長さ8.0mm、幅5.4mm、残存厚3.8mm(SA1:A区b 貼床)の扁平な楕円体で焼き崩れており、ダイズ類(*Glycine max* (L.) Merr. subsp. *max* (L.) Merr.)に似る。出土種子は、いずれも腹面の子葉合わせ目上にある長楕円形の臍と珠孔、種瘤を欠損し、幼根は不明瞭である。種皮は薄く、表面はやや平滑で断面は櫛状。焼き態により種皮が短軸方向に裂開し、内部が突出している。

第7表 種実同定結果

資料ID	試料情報	分類群	部位	状態	個数	備考		
資料5	SA1	A区a	貼床	10	炭化材		7	
					地下茎		2	
					蒴果		1	
		A区b	貼床	11	マメ科(ダイズ類?)	種子	炭化	完形 1 長さ8.0mm、幅5.4mm、残存厚3.6mm、網穴楕
					炭化材		破片 1 残存長3.1mm、網穴楕	
					破片		9	
	A区c	貼床	10	マメ科(ダイズ類?)	種子	炭化	破片 1 残存長5.6mm、網穴楕	
				炭化材		16		
				炭化材		22		
	A区d	焼土	14	炭化材			種実確認されず	
				マメ科(ダイズ類?)	種子	炭化	完形 1 長さ6.7mm、幅4.4mm、残存厚3.6mm、網穴楕	
				炭化材		破片 1 残存長3.0mm、網穴楕		
	B区c	焼土	13	炭化材			10	
				蒴果			1	
				タデ属	果実	炭化	完形	3
		D区a		14	マメ科(ダイズ類?)	種子	炭化	破片 1 残存長4.0mm、網穴楕
					炭化材		12	
					タデ属	果実	炭化	完形 1 2面体、長さ1.9mm、幅1.4mm、厚さ1.1mm
D区b	貼床	5	不明		炭化	破片 1 残存径3.7mm		
			炭化材			3		
資料6	SC7	2層	5	アカガシ亜属	殻斗	炭化	破片 2 残存径7.0mm	
								2 残存径6.1mm
				イタイガシ	子葉	炭化	破片 - 残存長13.0mm、残存径6.2mm	
				コナラ属	子葉	炭化	破片 2 最大径5.4mm	
				コナラ属・シイ属	子葉	炭化	破片 1 残存長4.1mm、残存径4.9mm、半分厚2.6mm、基部	
				不明		炭化	破片 1 残存径2.6mm	
		炭化材			1			
		1	炭化材			1 種実確認されず		
		3層	3	ヤマモモ?	核?	炭化	破片 1 残存径3.7mm、頂部	
							2	
				蒴果				
		合計						109

⑦ 考察

SA1は、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の竪穴建物跡と考えられており、年代測定結果でも調和する結果が得られている。SA1の貼床や焼土から出土した炭化種実には、栽培種の可能性を含むダイズ類に似るマメ科の種子と、草本のタデ属の果実が確認された。マメ科は、A区の貼床とB区焼土から出土しているが、タデ属は全てD区からの出土であり、位置によって種実の種類が異なる傾向がある。

ダイズ類やアズキ類などのマメ類は、近年の土器圧痕調査や種実遺体の研究で、縄文時代には既に食用

とされていた可能性が検討されている。マメ科は、可食部が炭化した状態で複数個が確認されたことから、建物内に保管されていた植物質食料に由来する可能性がある。

D区から検出されたタデ属は、明るく開けた場所を好んで生育する、いわゆる人里植物に属する草本であり、当時の建物跡の周辺に生育していた可能性がある。

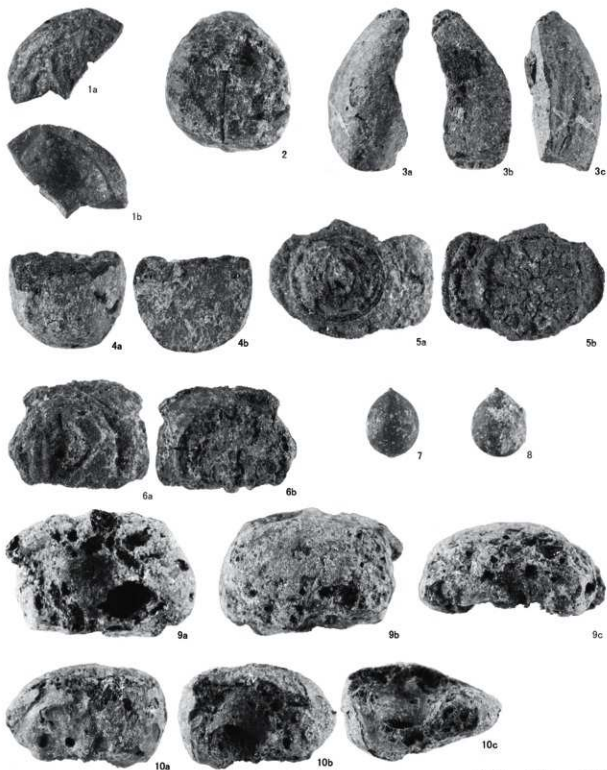
一方、SC7は、発掘調査所見から弥生時代後期と考えられるが、3層から出土した炭化材の年代測定結果では平安時代末～鎌倉時代前半に相当する値が得られており、炭化材は後代の擾乱等により混入した可能性がある。種実試料は、炭化材と同じ3層と、それより上層の2層から出土していることから、同じく後代に炭化材と共に混入した可能性がある。

SC7出土種実の同定結果をみると、ヤマモモの核？、アカガシ亜属の殻斗、イチイガシを含むコナラ属の子葉、コナラ属・シイ属の子葉が確認された。3層から確認されたヤマモモは照葉樹林内に生育し、2層から確認されたコナラ属アカガシ亜属イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で、現在は、紀伊半島、四国、九州の山麓地に広く分布する。これらの高木になる常緑広葉樹は、本地域の照葉樹林内に生育していたと考えられる。

イチイガシの堅果はコナラ属の中でも渋みが少なく、アク抜きせずに生食可能で収量も多いため、遺跡出土例も多い(渡辺, 1975; 岡本, 1979など)。また、ヤマモモは、果実が食用可能である。これらの炭化種実は、炭化以外には、人間による利用の痕跡が認められないが、いずれも可食であることから、植物食料として利用されていた可能性がある。年代測定結果を考慮すれば、SC7に伴うものではなく、後代に混入した可能性が考えられる。

【引用文献】

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 岡本素治, 1979, 遺跡から出土するイチイガシ. 大阪市立自然史博物館業績, 第230号, 31-39.
- 島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 林昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 渡辺誠, 1975, 縄文時代の植物食. 雄山閣出版, 187p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



2mm 2mm 1mm
 (3) (2.4-6.9,10) (1.7,8)

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1. ヤマモモ 核? (SC 7 ; 3層) | 2. イチイガシ 子葉(SC 7 ; 2層) |
| 3. イチイガシ 子葉(SC 7 ; 2層) | 4. コナラ属・シイ属 子葉(SC 7 ; 2層) |
| 5. アカガシ亜属 殼斗(SC 7 ; 2層) | 6. アカガシ亜属 殼斗(SC 7 ; 2層) |
| 7. タデ属 果実 (SA 1 D区b; 4層) | 8. タデ属 果実 (SA 1 ; D区a) |
| 9. マメ科(ダイズ類?)種子(SA 1 A区b; 4層) | 10. マメ科(ダイズ類?)種子(SA 1 B区c 焼土) |

第19図 種実遺体

第IV章 総括

本章では、時代順に県道北方土々呂線道路改良工事に伴う発掘調査結果についての検討を加える。

旧石器時代

石器2点が出土した。出土した層位は縄文時代早期以降の層だが、流入等によるものと考えられる。

縄文時代

K-Ah層下位のIV層及びV層から集石遺構を検出した。層準及びSI2・SI4で実施した放射性炭素年代測定値より、それらの集石遺構は縄文時代早期に構築されたものであると考えられる。遺物は、IV層及びV層から石器8点が出土している。燃系文土器(第7図3)や押型文系土器(第7図4～7)が、集石遺構との関連を有する遺物であろうか。また縄文時代晩期の無刻目突帯文土器や黒色磨研土器も出土している。

弥生時代後期後葉から古墳時代初頭

弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の竪穴建物跡(SA1)と木棺墓と推定される土坑(SC7)を確認した。SA1は西側から南側にかけてL字状のベッド状遺構があったが、明確な主柱穴がみられなかった。出土遺物は小形甕や小形壺、磨製石斧、台石などがある。出土土器は、日向市の板平遺跡における編年観をもとに、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の土器群と位置付けた。放射性炭素年代測定ではSA1出土の炭化材は弥生時代後期と推定されており、出土遺物と概ね整合する。なおSA1の種実同定から、ダイズ類に似るマメ科の種子(可食部が炭化した状態を複数個確認)やタデ風の果実が確認されている。

SC7は南北を軸にしたほぼ長方形に近い形状の遺構である。明確な段構造の有無は確認できず、周溝も検出されなかった。埋土の1層から緑色凝灰岩製の勾玉が出土し、4層から同石材の小玉が出土している。またSA1出土の小形甕とSC7の3層出土の土器片が接合していることなどから、SA1と同時期の遺構である可能性が高い。なお本遺跡の北東部に位置する山田遺跡では、ほぼ同時期の土壇墓や周溝墓が検出されており、類似する遺構と捉えられる。

まとめ

本遺跡は、烏帽子岳から小切畑集落へ向けて伸びる緩やかな丘陵尾根の先端付近に位置しており、山地から平野へと移り変わる地形である。また北には東西方向に五ヶ瀬川が流れている。本遺跡の調査面積は約385㎡と比較的狭い範囲だったが、本遺跡の東側は更に平坦な地形が広がり、同様の遺構や遺物が包含されている可能性がある。文献資料によれば、「今山八幡宮旧記」で、天永元年(1110年)に「三和」(現上三輪町)が10月放生会の神馬東舞二人を負担していることが記されている。

本遺跡周辺には、古から人々の生活が存在していることが判明し、その痕跡の一端について調査・報告することができた。当地域の歴史を解明する上でも意義深い成果を得た。

【参考文献】

延岡市史編さん室 2013 『延岡市史 市制八十周年記念十年史』 延岡市

北方町史編纂委員会 1972 『北方町史』 北方町

下中弘 1997 『日本歴史地名大系46 宮崎県の地名』 平凡社

宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「板平遺跡(第3次・4次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集

宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第146集

図版 1 遺構(1)



SI 1 検出状況(東から)



SI 1 配石検出状況(東から)



SI 2 検出状況(東から)



SI 2 配石検出状況(東から)



SI 3 検出状況(南東から)



SI 3 配石検出状況(西から)



SI 4 検出状況(南から)



SI 4 配石検出状況(北から)

図版 2 遺構(2)



SI 5・6 検出状況(南西から)



SI 7 検出及び土層堆積状況(東から)



SA 1 貼床及び遺物検出状況(南から)

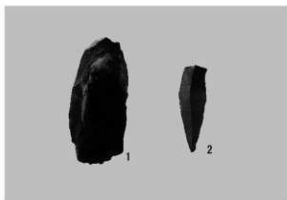


SC 7 土層堆積状況(西から)

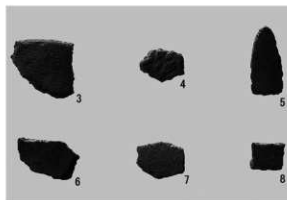


勾玉出土状況(南東から)

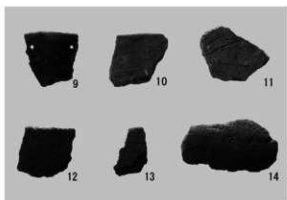
図版3 遺物(1)



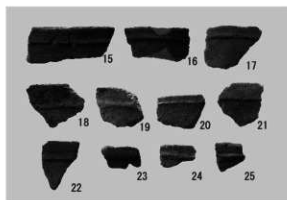
スクレイパー・石刃



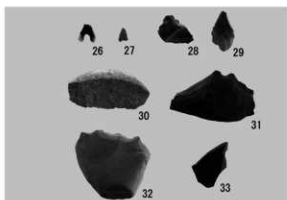
橋系土器・押型文系土器・沈線文系土器



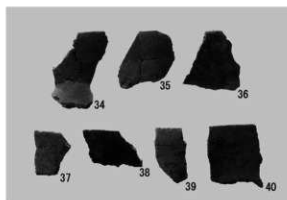
晩期浅鉢・深鉢



無刻目突帯文土器

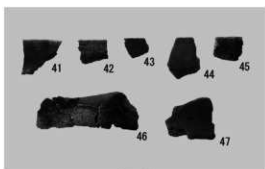


縄文時代の石器類



甕

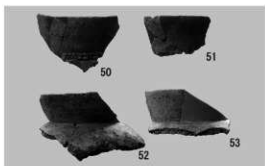
図版 4 遺物(2)



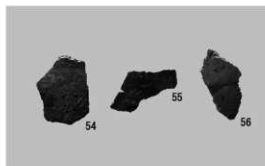
甕・鉢



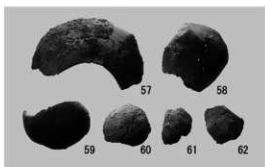
小形甕・小形壺



壺



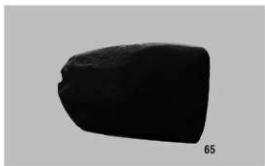
壺



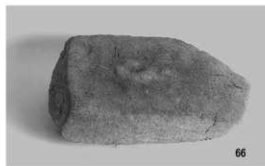
壺



高坏



磨製石斧



台石

報告書抄録

ふりがな	かみみわこざりばただいいちいせき								
書名	上三輪小切畑第1遺跡								
副書名	県道北方土々呂線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	第231集								
編著者名	木場 正浩								
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター								
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地								
発行年月日	2013年3月7日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
かみみわ こざりばた だいいちいせき 第1遺跡	宮崎県 のべのし 延岡市 かみみわ おまち 上三輪町 あさこざりばた 字小切畑 2777-4・5	45303	4092	32度 55分 00秒 付近	131度 55分 59秒 付近	2012.12.4 ～2013.3.7	385㎡	記録保存 調査	
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項		
集落	旧石器時代			石器(スクレイパー、石刃)					
	縄文時代早期	集石遺構	7基	土器(押型文、条痕文、撫糸文、沈線文) 石器(石鏃、石匙、二次加工剥片、剥片、石核、礫器、スクレイパー)			放射性炭素年代測定よりSI2・4は縄文時代早期と考えられる。		
	弥生時代 後期後葉から 古墳時代初頭	竪穴建物跡	1軒 土坑 1基	土器(甕、壺、鉢、小形甕・壺、高坏) 石器(磨製石斧、台石、勾玉、小玉)			SA1出土の小型甕とSC7出土の土器の小片が接合した。		
要約	上三輪小切畑第1遺跡は延岡市上三輪町に位置する。調査の結果、縄文時代早期の集石遺構7基を検出した。また弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の竪穴建物跡と木棺墓と推定される土坑が検出され、同時期の遺構群と考えられる。								

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第231集

延岡市所在

上三輪小切畑第1遺跡

県道北方土々呂線道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地

T E L 0985(36)1171 F A X 0985(72)0660

印刷 有限会社 鉦脈社

〒880-8551 宮崎市田代町263番地

TEL 0985-25-1758 FAX0985-25-1803

Nobeoka City

KAMIMIWA KOGIRIBATA 1 Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center

Vol. 231

2014

Miyazaki Prefectural Archaeological Center